
白昼夢

枢機卿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白昼夢

【Nコード】

N4363R

【作者名】

枢機卿

【あらすじ】

普通の高校生たちの日常。

その中にある複数の歪み。

歪みが重なり合うことで起こる殺人事件・・・

独白

ボクは、良い子だった。

昔から、ボクは特に問題も起こさず成績もそれなりに優秀だった。たぶん、優等生と言われる部類に含まれるだろう。それはボクの誇りでもあり、重りでもあった。

周りの期待に応えようとするボクと、それを苦しく感じているボク。いま思えば、自分の個性を出さずにまわりに合わせて生活していた。ボクが歪んでしまったのもそのことが原因だろう・・・だからと言ってその所為にするつもりはない。あれをしたのはボクで、他のだれでもないのだから。

そう、ボクは良い子じゃなかったんだ。むしろ、その逆だったんだ。

ボクは・・・人を・・・殺した。

谷口 翔 ？

俺は迷っていた。どうすればいいんだ・・・
ただいまの時刻は午前8時25分。「HR」^{ホームルーム}は午前8時30分から。
だが、そんなことはどうでもいい。どうせ走ったって間に合わん。
俺が迷っているのは学生たちのたのしみの一つ、弁当をどうするか
ということだ。

『昨日は弁当だったし、今日はパンにするか？いや、今日はご飯の
気分だ。でも、パンのほうが安いよなあ・・・』

そうして、2・3分コンビニの弁当コーナーで考えた結果、俺はチ
キンカツの入っている弁当を手にとってレジに向かった。

『まあ、ガッツリ食いたいしな。』

そんなことを考えながら、俺はレジで500円を出してそれを買
い、学校に向かうことにした。

時刻は8時29分。

「・・・完全に遅刻だな。」

俺は歩きながらそうつぶやき、携帯を取り出して電話帳の一番最初
にいる「安藤 涼子」にメールを書いた。

notitle

今日の一時間目なんだ？

.....end.....

メールの返信を待っていると1分もかからずに涼子から電話がかか

つてきた。

「翔^{かける}?、今どこにいるの?」

「何処^{どこ}つて言われても・・・一応学校に向かってるけど。」

「今日はどうしたの?また、猫でも見えて遅れたの?」

「そんな馬鹿なこと何度もするわけないだろ。今日はただ単に道に迷ったんだ。」

「・・・十分馬鹿よ、それ。一ヶ月も通ったんだから道ぐらい覚えなさいよ。で、いつ来るの?」

涼子は電話越しでも聞こえるほどのため息をついて言った。

「たぶん、二時間目には楽勝。一時間目も走ればなんとか間に合うぞ。で、一時間目ってなんだ?」

「一時間目は数学だけだ。」

「わかった。二時間目から行く。」

数学は苦手じゃないが、あの先生は好きじゃない。教え方はうまいと思うのだが、コーヒーとタバコと加齢臭が混ざったような臭いがプンプン臭ってくる。

「まったく、たまには出なさいよ。でも、二時間目にはくるのね。」

久保先生には伝えておくから。」

「サンキュ。助かるよ。」

「それじゃあね。」

「あ、ちよつと待って。」

「何?もう先生くるんだけど・・・」

俺はどうしても涼子に言っておきたかった。

「俺は馬鹿じゃないぞ。オマエよりテストの点がいいからな。」

「ツー、ツー。」

切られたか・・・。もしかして怒ったか?

いや、アイツは見かけによらず心優しい子のはずだ。この程度で怒ったりしないだろう。

うん。・・・たぶん

谷口 翔 ？

俺が学校に着いた時は、9時をまわっていた。

一時間目は8時50分から始まるので、完全に遅刻だった。

『さて、どこで時間を潰そうか……。下手にうるつくと教師に見つかりそうだし、うちの学校は屋上行けないしな……。』

学校の屋上は、安全面を考えて行く事はできないようになっていた。一度、涼子と勇太と一緒に行こうとしたことがあるが、屋上へのドアは施錠されていて開かなかった。

『なら、やっぱりココしかないよな。』

結局、俺は図書館に来ていた。一応司書の先生はいるのだが、利用は自由で授業時間に来ても特に何も言っただけな人なので、俺はサボるときは大抵ここをつかっている。

俺は奥の席に腰掛けて、読みかけの小説を本棚から取り出して読み始めた。世界的に有名なメガネをかけた魔法使いの話の4巻だ。

『さて、どこまで読んだっけな。』

「キーンコーン、カーンコーン」

聞き慣れた授業の終わりを告げるチャイムの音が鳴った。

「ん、もう終わりか。また、読み終わらなかつたな……。」

また、読みに来よう。そんなことを思いながら、俺は本を棚に戻して、足早に図書室を出た。

一年の教室は4階にある。どうして、1階で無いのかはまったく知らない。先生方にも、なにかしらの考えがあるんだろう……。あるよな？

そして、俺は一年二組の教室に着いた。とりあえず、教室に久保先生が居ないことを確認した。

『よし、居ない。』

俺はドアを開け、中に入った。

座りなれた自分の机に座り、周りを見渡した。

『涼子は・・・居ないのか、トイレか？勇太は・・・』

「お！来たのか、翔」

後ろから聞き慣れた声が聞こえる。

「遅かったじゃん。俺はもう寂しくて、寂しくて・・・。」

「気色悪いぞ。」

「ひどい！せつかく、人が親友のことを心配していたというのに。」

「お前、朝っぱらから、ウザいな。」

いつもの朝の風景だ。俺と勇太はいつもこんな感じで、小学校からの付き合いだ。昔はそんなに一緒に遊んでなかったが、気づいたら仲良くなっていた。まあ、親友を一人選べと言われたら、まずコイツが拳がるだろう。

「あ、翔来たんだ。おはよう。」

「「涼子」」

勇太とハモツた。

「涼子」。聞いてくれよ。翔ひどいんだぜ。」

「はいはい、いつも通りね。翔がひどいのは、今に始まったことじゃないでしょ。」

「ひどい言われようだな。俺だって傷つくんだぞ。」

涼子とは中学校からの付き合いだ。もともと家は近所だったが中学までは交流が無く、たまたま、クラスと部活が同じで仲良くなった。それ以来、三人で遊びに行ったりするようになった。

「そういえば、翔、久保先生が呼んでたら昼休みに職員室に行つてね。」

「拒否する！！」

「・・・私に言われてもどうしようもないよ。」

はあ、仕方ない。職員室は嫌いなんだがなあ。

あの部屋は悪いこととしてなくても居心地悪いよなあ。

・・・悪いこと、してない・・・よな・・・

谷口 翔 ？

二時間目。教科担任の安田先生が入ってきて点呼を取り始めた。どの先生も点呼を取るわけではないが、この先生は授業のはじめに必ず点呼を取っていた。

「安達」

「はい。」

「池田」

「はい。」

「……点呼は男子が先で女子が後だ。俺は谷口だから大体男子の真ん中あたりだ。」

「佐原」

「はい。」

勇太が呼ばれた。もうすぐ俺が呼ばれる。

「谷口」

「はい。」

その後、男子は全員名前を呼ばれ、次に女子が呼ばれ始めた。男子の欠席者は居ないようだ。

「はい、じゃあ次女子行くぞー。安藤」

「はい。」

涼子は女子の出席番号一番だから、当然ながら一番に名前を呼ばれる。まだ、高校に入学してから一ヶ月ほどしか経っていないので女子はほとんど名前が分からない。男子の名前もフルネームで覚えているのは一部だけだ。

「高木」

「……」

「あれ、高木は休みか、珍しいな。じゃあ、次、高田」

「はい。」

高木はお休みか……あれ？

「なあ、勇太。高木ってどんな人だっけ。」

俺は隣の席の勇太に小声で聞いた。

「お前・・・クラス委員くらい覚えとけよ。」

勇太も小声で俺の質問に答えた。

「クラス委員だっけ？」

まったく覚えが無かった。

「そつだぞ。高木 小夜子こよこさん。覚えておいたほうがいいぞ。勉強も出来るし、メガネ美人だし、優しいし、一年だというのにバレエ部のレギュラーにまで抜擢はくたくされていて」

「わかった。もういいぞ。」

こいつの頭の中には、学年中の女子のデータでも入ってるのかね・・・。

二時間目の授業はいつも通り退屈で、三時間目の授業もいつも通り退屈だった。4時間目も、勇太が黒板で珍回答を書いたこと以外は別に一般的な授業だった。

そして、昼休み・・・。

谷口 翔 ？

昼休み。俺は勇太と一緒に弁当を食べようと思って、買って来た弁当を開けようとした所で涼子に声をかけられた

「翔、久保先生の所行った？」

「ただだけど、飯食ってからでよくな。」

「なら、さっさと食べて行つてよ。行かなかつたら私の所為になるんだからね。」

「はいはい。」

そう言つて、俺は弁当のフタを開け食い始めた。量はもう少し欲しいところだが、味は文句無い。最近のコンビニの弁当はよく出来ている。

「ん、涼子、お前は食わないの？」

涼子は立つたまま、俺たちが食うのを見ていた。

「いっしょに食べないの？イス持ってきたら？」

「そうだね、どうしよっかな・・・。」

涼子は女友達と食べることもあれば、俺たちと食べることもある。たぶんそれを考えているんだろう。でも、早く決めないと昼休みが終わっちゃうぞ。

「涼子ちゃん、一緒に食べよ。ってあれ、今日は谷口君たちと食べるの？」

「あ、鈴木さん。ううん、今日は鈴木さんたちと食べる。じゃあね、翔、勇太。ちゃんと職員室行ってよ。」

そう言つて、涼子は鈴木さんたちの方へ行つた。鈴木さんも俺たちと同じ中学だった。涼子との関わり以外での交流は無かつたけどな。

「ふう、食つた食つた。ご馳走様でした。」

「お前はいつも食べるの早いな。」

「今日は用事があるから特別だよ。それじゃ、職員室行つてくるわ。」

「ふいつへらつしゃい。」

勇太、食べながらしゃべるのは止めたほうがいいぞ。

俺は階段を下って、二階にある職員室へ向かった。食ったばかりだからか、腹が少し重たい。

「失礼します。」

俺は職員室の中に入って、久保先生を探した。久保先生は案外すぐに見つかり、パソコンでなにかしらの仕事をしているようだった。

「久保先生、谷口ですけど。」

「ああ、来たのか。じゃあ、とりあえずここに座って。」

久保先生は痩せて気弱そうな顔を俺に向けながら、パイプイスを渡してくれた。俺はそれに腰掛けて久保先生が話し出すのを待った。

「まあ、大した話ではないんだがな。最近少し遅刻が多いのが気になったんだが、何か悩みでもあるのか？学校に来づらいわけでも。」

「いえ、そんなことは。早起きがすこし苦手なだけです。」

「そうか。それならまあいいが。とりあえず、遅刻の回数を減らすように心がけてくれ。」

「わかりました。話はそれだけですか？」

「ああ。それが少し気になったただけだからな。」

「それなら、失礼します。」そう言っただけで俺はパイプイスを先生に返して職員室から出て行った。

『こんな事ぐらいで呼ぶなよな。まあ、生徒思いな先生ではあるんだろうけどな。』

俺はこんなことを考えながら一階まで降りていった。一階にある売店で飲み物でも買おうと思っていたのだ。一階は三学年が使っているので体育と売店以外に降りてくることはほとんどない。

売店でレモンティーを買って、俺はすぐに教室に戻ることにした。他学年の階なんて居心地の良いものじゃない。

そして、俺が階段を上ろうとした時、

「グシャッ」

かなり大きな音が響いた。

「なんだ？今の音。」

俺は音が聞こえた玄関の方へ急いだ。

「え、何あ・・・キヤー」

「ウワー」

玄関の方から聞こえていたざわめきが、急に悲鳴の群れへと変化した。俺が玄関に着いた時その場に居た生徒の多くが眉一つ動かさずに、顔面蒼白で一点を凝視していた。

たぶんそれを見た時、俺も皆と同じような状態になっていただろう。そこには、制服を真っ赤に染めた女生徒が地面に横たわっていた。

閑話 ?

ねえ、聞いた。空から降ってきた女生徒の話。

聞いた聞いた。昨日、屋上から自殺した女生徒のことですよ。

えっ、自殺だったの？

自殺でしょ。うちの学校は基本的に屋上行けないんだしさ。

そっか。そういえば、そのことで今日全校集会があるんだって。

そりゃしょうがないでしょ。人が一人死んでるんだし。

でも、面倒くさいよね。うちら今年大学受験じゃん。集会なんか出させないで勉強させろっての。

なあ、お前は聞いた？昨日の女生徒の話。

聞いたよ。すげえ噂になってるじゃん。殺された女生徒の話だろ。

えっ、僕は自殺だって聞いたけど・・・

実はさ、昨日警察の人たちの話聞いちゃってさ。そしたら殺しみたいなこと言ってたんだよね。

でも、屋上から飛び降りたんですよ。

飛び降りじゃなくて、つき落とされたのかもしれないじゃん。

そうだな。そういう可能性もあるね。

安藤 涼子 ？

「えー、本日はみなさんに悲しいお知らせがあります。もう、知ってる人や現場を見た人が居るかもしれませんが昨日、一年二組の高木小夜子さんが亡くなりました。」

「あーみなさん、いいですか。静かにしてください。話を続けますよ。」

体育館中のざわつきが急速に静まっていった。事件の詳細について皆が知りたがっているみたいだった。

「えー、高木さんは昨日、不幸な事故によって屋上から転落してしまつたようです。現在警察の方が屋上を現場検証をしていますので、みなさん迷惑をかけないようにしてください。えー、それから・・・」

突然知らされたクラスメイトの訃報。正直、このとき私は校長先生の話をもつたく飲み込めていなかった。たぶん、クラスの皆も同じきもちだつたんだろう。皆、驚いたような、理解出来ないような表情で呆然としていた。そんな私たちの呆然とした状態を意に介さず、校長先生は高木さんのことを壇上で話し続けていた。

「高木さん。死んじゃったんだ。そっか、うん。死んじゃったんだ。」

私が高木さんの死というものを少しずつだが認識していると、隣から嗚咽が聞こえてきた。顔を向けると渡部くんがすすり泣いていた。彼も確かクラス委員で、高木さんとは割と仲良くしていた男子の人だろう。

「渡部君、大丈夫？」

渡部君はぐしゃぐしゃになつた顔をこちらに向けた。

「グスツ、ウ・・・え、うん。だ、だいじょうぶ。ごめん。ありがと。」

渡部君はぎこちなく笑い。泣き止もうと必死になっていた。私は彼が泣き止むのを待って、もう一度彼に話しかけた。

「渡部君は、その、仲良かったの？高木さんと。」

「うん、うん。クラス委員で一緒だったから。中学校もね同じだったんだ。よく一緒に話したりとか・・・ウ、ウウ。」

渡部君はまた泣き出しそうになってしまったので、私は彼に話しかけるのを止めることにした。それからは集会が終わるまで二人ともずっと無言で居た。

「・・・えー、では、最後に高木さんに黙祷を捧げたいと思います。では、全員黙祷。」

「それでは、退場に移りたいと思います。三年生から退場してください。」

生徒指導部の先生の声で三年生から退場していき、二年生がそれに続いてく。

「やっと、終わったな。」

「ああ、早く戻って模試の勉強しなきゃな。」

「今日、これで終わりだよな。」

「おお。早く帰ってどっか行こうぜ。」

自分たちは無関係だと言うような顔をして、二、三年生は退場していった。確かに、彼らには直接の関係は無く、高木さんの顔も知らない人も多いんだろう。彼らには彼らなりの予定や、やらなければならぬことがあるんだろう。でも、

「なんだろう。なんか、」

「なんか、嫌だ。ってそう思った？」

いつの間にか翔が隣に来ていた。

「うん。でも、何でわかったの？考えてること。」

「割と長い付き合いだからな。顔見りゃ分かるさ。」

翔はいつもは結構適当で人の顔もまともに覚えてないヤツだけど、昔からこういう所だけはちゃんと見ている。

「てか、俺もそう思ってたし。腹立つよな、ああいうの。自分たちは関係無いって顔しちゃってさ。明日はわが身、かもしれないのさ。」

「うん。でも、しょうがないよ。立場が逆だったら私もああいう態度取ったと思うし。」

翔といっしょに話しながら教室に戻るとすぐにHRホームルームが始まり、担任の久保先生がいつもとは違い険しい顔で話始めた。

「とりあえず、今日はこれで解散になるから。高木とは短い付き合いだったが、皆それぞれ思うところがあると思う。今日は出来るだけ早く帰って、頭の中を整理してくれ。」

HR中もすこしの話し声が聞こえるのがいつもだが、今日はシーンとして皆、久保先生の話に聞き入っていた。

「あと、高木の葬儀の件だが、一年生は各クラスから担任とクラス委員が行くことになっているから。渡部、頼むぞ。」

渡部君は小さくうなずいた。まだ、すこし目が赤くなっていた。

「それくらいかな、今日伝えることは。詳しいことはまた明日知らせるから。それじゃ、今日は解散。」

解散と言ってすぐに久保先生は教室から出て行ったがほとんどの生徒は教室に残ったまま、友達同士で高木さんのことについて話し合っているようだった。私もすぐに帰る気にはならなくて、翔と勇太のところへ行くことにした。

安藤 涼子 ?

「いや、だからさ。変だろ。普通に考えてさ。」
私が二人のところへ行くと、勇太が翔に話しかけているところだった。

「何話してんの？」

「ん、いや、今日の話のことだけど……。涼子はどう思った？」
勇太は珍しく真面目な顔をして話しかけてきた。

「どうって？」

「高木さんのことさ、校長は不幸な事故って行ってたけど。……。本当に事故だったのかな？」

勇太は回りに聞こえないように小声になった。

「事故じゃないとしたら……。自殺？もしくは殺人だつて言うの？」

「その可能性が高いと思うんだ。だってさ、うちの屋上つて基本封鎖されてるじゃんか。それなのにわざわざそこに行つて偶然事故が起きたつてのかわ？」

「確かにそれはそうだけど、」

私はまだ納得できない感じがした。

「それに、昨日来てなかっただろ、高木さん。屋上に何かしら用事があったとしても教室には寄つたんじゃないか？」

「でも、クラスではいつも明るかったし、自殺するような理由も……。殺人はもつとありえないでしょ。人に恨まれるような人じゃなかったし。」

そう言うと勇太はすこし困ったような顔をして、

「そうなんだよなあ。自殺は見た感じしそくに無かったし、殺したいほど恨まれるってタイプじゃないよなあ。……。てか、翔聞いてる？さつきから黙ってるけど。」

そういえばさつきから翔は一言も話さず、会話に入ってきていなかった。どうも、何か考え事をしているようだ。

「ああ、うん。聞いてるぞ。」

「ほんとうか？」

勇太が疑うように言った。

「だいじょうぶ？具合でも悪いの？」

「いや。・・・二人ともこれから暇か？」

「俺はだいじょうぶだけど。」

勇太が私のほうを見てきた。

「私も大丈夫だよ。」

「なら、二人とも付き合ってくれ。」

そう言つと、翔はカバンを持って教室を出て行ってしまった。

「おい、ちょ、待って。」

勇太は慌てて翔の後を追つていった。私は急なことで一瞬出遅れてしまったので、私が教室を出たときには二人の姿はもう見えなくなつてしまつていた。だから、とりあえず二人が行つた方向へ走つていくと、階段の前に見知つた顔があつた。

「鈴木さん。翔と勇太来なかつた？」

「あれ、涼子ちゃん。二人なら今来たよ。凄い勢いで階段下りてつた。」

鈴木さんにお礼を言い、私も階段を下りていこうとすると、

「もう帰るの？私も一緒に帰つていい？」

「ええと、あの、急いで。」

私は彼女にそう一言言つて階段を下りていった。すると、一階の玄関の靴箱の前に二人の姿が見えた。

「待つてよ。二人とも。は、早いよ。」

息を整えながら二人に向かって言つと、

「翔が急に走り出すのが悪いんだつて。・・・で、話つて？」

勇太がそう言つと、翔はすこしばかり考えてから、口を開いた

「ああ、実は」

「涼子ちゃん。ま、待つて、待つてよ。」

階段のほうからドタバタという足音と自分を呼ぶ声が聞こえたので

振り返ると、鈴木さんが走ってきていた。

「帰るんでしょ。私もいつしよに」

「おい、なんで鈴木がいるんだ？」

翔がこちらを伺うような感じで見てきた。

「さつき、そこで会ったんだよ。」

鈴木さんはすこし気まずそうな顔をして、

「あのさ、私来ちゃダメだった・・・かな。」

「別にダメじゃないんだけど・・・。なあ、鈴木。これから俺が言うことを秘密にできるか？俺たちだけの秘密に。」

鈴木さんは一瞬キョトンとした表情をしたが、私たちの顔を見るとすぐに真面目な話だと分かったようで、すぐに顔を引き締めた。

「うん。大丈夫。」

「・・・わかった。信じよう。」

翔は鈴木さんの顔を見て納得したように頷いた。

「それじゃ、話すけどさ。今言ったように他言無用で頼むぞ。・・・

さて、話るのは今日の高木の話のことだ。」

私は背中に妙に冷たい汗が流れるのを感じた。

「実はさ、俺、昨日見たんだ。高木の遺体。」

安藤 涼子 ？

家に帰ると、まだ誰も帰ってきていなかった。私は手も洗わずにそのまま自分の部屋に行き制服のままベッドの上に仰向けで横たわった。

「ふう。」

ため息をついてから目を閉じ、今日の翔たちとの会話を思い出していた。

「え、見たって本当に。」

私が恐る恐る聞くと翔は表情を変えずに黙って頷いた。

「お前、何でそんな大事なことを言わないんだよ。」

勇太が翔に詰め寄って言った。

「・・・誰かは分からなかったから。それに、正直あの時は別に大したことだと思ってなかったんだと思う。知り合いじゃなければ別にいいって考えがあったんだと思う。」

翔はすこし辛そうに、そして気まずそうに言った。その翔の言葉で皆が口を噤んだ。私も何か言っただけだったが、かけてあげる言葉が何も出てこなかった。しかし、数秒の静寂のあとで意外な人が口を開いた。

「あの、他にも何かあるんじゃないですか？」

鈴木さんがそう言うのと翔はすこし驚いた顔をしたが、すぐに真面目な顔に戻った。一瞬だが顔が緩んだようにも見えた。

「・・・。そう、これが本題じゃないんだ。肝心なのはこの続きなんだ。」

翔は焦らす様に一呼吸置いてから話し始めた。

「お前らは、誰か飛び降り自殺した人の現場に居合わせたことあるか？」

翔は私たち三人の顔を見たが、皆黙って首を横に振った。

「俺も初めて見たから、詳しいことは分からないんだが、飛び降り
ってどうして死ぬか知ってるか？」

「私、知ってます。」

「またも以外だったか鈴木さんが口を開いた。」

「飛び降りには地面にぶつかった時の衝撃で身体の各部に損傷が出て
死ぬらしいです。だから、外傷はまったく無くても、内臓が傷つい
て死んでしまう場合も多いんです。お年寄りや心臓の弱い人はぶつ
かる前に恐怖で心臓麻痺で死んでしまうケースもあるらしいです
け
ど。」

この説明を聞いた時すこしばかりゾツとしたのを覚えている。勇太
も同様らしく、気持ちが変わるような顔をしていた。

「じゃあ、・・・地面にぶつかった衝撃で身体が血まみれになるこ
ともあるのか？」

「えと、たぶん、普通は無いと思います。それにうちの学校の屋上
からなら外傷はそんなに無い場合が多いと思います、きっと。もし
かしたら、死なない可能性もあつたとおもいます。」

その鈴木さんの言葉を聴くと、翔はまた一瞬ニヤツと笑ったように
見えた。

「でもな、俺が見た高木の遺体は全身真っ赤だったんだ。」

「えっ。」

私たちはこの翔の言葉が何を意味するのかよく分からなかったが、
鈴木さんだけはこのとき妙に驚いた顔をしていた。

「それって、もしかして、そういうことですか？」

「たぶん、そう考えるのが普通じゃないか。」

「お前ら二人だけで納得スナ。俺らにも説明しろ。」

勇太のこの言葉には激しく同意できた。正直なにを言いたいのかが
理解できなかつた。

「結論から言つとさ、高木は殺されたんだと思うんだ。俺はさ。鈴
木もその意見に賛成か？」

「・・・はい。たぶんそうだと思います。」

「ちょっと待てよ。どういう理由でだよ。」

「お前がクラスで行ってたる。事故だと考えるのはおかしいって。それなら、自殺か他殺かだろ。だから、俺もそれを考えていたんだが、今の鈴木の説明で納得がいった。」

「だから、どういうわけなんだよ。」

勇太はすこしイライラしてきたみたいだった。

「今話してやるから。昨日高木の遺体を見た時、服が血だらけだったんだ。でも、もしかしたら生きてるかもしれないと思って近づいたときに気づいたんだ、ケガしてないって。」

「え、ケガしてないってことは・・・あ、そうか。そういうことか。」

「私はやっとふたりの言ってることが頭の中で繋がった。確かにそうだ。二人の言ってることが一番理にかなってる。」

「俺はまだなんにも分かんないんだけど・・・もつと詳しくお願います。」

勇太は二人に擦り寄って言って、二人の考えを事細かに説明してもらっていた。その間に私は頭の中を整理して、ふたりの考えをまとめていた。

つまり、高木さんがただ屋上から落ちただけなら、ほとんど外傷は無く死んだはず。頭から落ちて頭が砕けたとしても全身血まみれにはならない。しかし、実際は血まみれで発見された。ここから考えられることは、何かしらの外傷を負ってから落ちたという事だ。しかも、かなりの出血をするほどの外傷を。

だが、飛び降り自殺をしようとしている人がわざわざ自分の身体を傷つけることはないだろう。飛び降りてしまえば済むんだから。飛び降りるほうが痛みも少ないだろうし一瞬だ。

これらの点から考えると、傷を負わされてから落とされたと考えるのが自然。だから、他殺の可能性が高い。まあ、こういうことなんだろう。

「あゝ、なるほど。」

勇太は感心したようにウンウン頷いてる。

「でも、こんなこと分かってもしようがないんだけどな。警察もこれぐらいは気づいてるだろうし。」

確かにそうだ。こんな事わかってもしようがない。第一、推理の根拠になっている遺体は4人中3人が見ていないんだから、間違ってる可能性もある。

「じゃあ、どうして話そうと思ったんですか？」

「たぶん、自己満足。」

翔は自嘲するように笑って言った。

「気になったから、どうしても結論をつけたくなくなったんだ。本当にただの自己満足だよ。こんなこと考えたってなんにもなら」

「え、犯人捜すんじゃねえの？」

はあ、思い出しただけでもため息が出てくる。勇太が犯人をさがしたいと言い出すと、なんと真つ先に鈴木さんが同意してしまった。後々話を聞くと、昔から推理小説が好きで、こういうシチュエーションに憧れていたらしい。さっきの飛び降りについての詳しい知識もそこから学んだようだ。そのあと、翔もすつきりしたいからって理由ですつかり探す気になってしまったし。そして結局、4人で犯人探しをすることになってしまった。

「はあ、明日からどうなるんだろ。」

佐原 勇太 ？

「とりあえずさ、分かっている事だして見ようぜ。」

全校集会のあった次の日、俺たちは放課後教室に集まって高木さんを殺した犯人の推理を始めることにした。いつもは教室に何人かの生徒が残っているのが常だが、高木さんのことを聞いたシヨックだろうか、今日は出席日数がとも少なく教室に残って勉強しようという人たちも居なかった。このことは、あまり他の人たちに話を聞かれない俺たちにとっては好都合だった。

「分かっている事って言われてもねえ。」

涼子はチラッと翔のほうを見た。

「翔の記憶から探り出していくしかないでしょ。ちょっと無理があると思うけど。」

涼子はやはりまだ乗り気ではないようだ。

「やっぱり、屋上を見にいけばいいじゃないか。そこが高木の殺害現場の可能性が高いんだし。」

「でも、警察の人が封鎖してるらしいですよ。」

「ふふふ、甘いよ鈴木ちゃん。封鎖されてるのなら、封鎖を解けば言いだけの話さ。」

俺が得意げに言うと、涼子がため息をついてこっちを見てきた。なんか可哀想なものを見るような目で見られてる気がする。

「馬鹿は置いとくとして、本当にどうするの？」

「まあ、馬鹿は置いとくとして、屋上は封鎖されてるし、鍵も新しいのに変えたらしいからな。進入するのは一苦労だぞ。」

『二人してヒデゥな。・・・馬鹿じゃないもん。』

二人の言葉にだいぶ傷つきながらも捜査方法を考えているふりをする。

「でも、あの、情報も集めなきゃならないと思います。私たちは分かっていることが少なすぎるので。」

鈴木さんがオズオズと控えめに意見をだした。確かに一理ある。俺たちは事件の詳細をほとんど知らないのだ。

「なるほど。確かに。じゃあ、屋上に行く者と情報を集める者に分かれて捜査をしようか。」

「いいけど、どう分けるの？」

「はい。はい。男女混合が」

「却下」

「まだ全部言っただけさ。」

翔に俺の意見が喰い気味に却下されてしまった。

『なんでコイツは男女混合が嫌なんだよ。ふつうは男と二人つきりより女子と二人の方が・・・ま、まさかコイツ、そ、そっち系の』俺が背中を嫌な汗が流れた。

「お前の考えることは丸つきり違うからな。」

翔は呆れ顔で俺の考えることにツッコミを入れてきた。翔は昔から妙に勘が良いところがあつて、たまにこうやって俺の考えることを読み取られる。小学校の時超能力者だと疑ったほどだ。

「俺とお前、涼子と鈴木に分けるのはそれが多分一番効率が良いからだ。ちなみに俺たちは屋上で、涼子たちは情報集めね。」

「わ、私屋上行きたいです。」

鈴木さんが手を挙げて主張した。最近分かったことだが、鈴木さんはあまり意見を出さない人だと思っていたが違うようだ。案外言いたいことは主張する人間だった。急に鈴木さんが手を挙げたので翔は驚いたような顔をしたがすぐにいつもの顔に戻って言った。

「このわけ方にはちゃんとした理由があるんだ。まず、男二人で起きたばかりの女子が死んだ事件の情報を集めてたら悪目立ちするだろ。それに大抵の人は男より女の方が気を許しているいろ話してくれるからな。」

「でも、それなら私と谷口君、涼子ちゃんと佐原君の組分けが良い筈です。それに何かあった時のために情報集めにも男の人が居たほうが良いと思います。」

これもこの時知ったことだが鈴木さんはなかなか頑固者のようだ。てか、

『それ、俺と鈴木さんが同じ組でもいいよね。・・・頼りないってことか。』

鈴木さんの言葉を聴くと翔は少し困ったような顔をしていた。

「確かに、それはそうなんだが・・・。」

翔はそう言つと涼子のほうをチラッと見た。涼子もその目配せに気づいたようだ。

「実はな、俺の考えている屋上への進入方法がすこし過激なんだ。

それで、俺と勇太のほうが好都合なんだよ。だから、今回は情報集めに回つてくれないか？写真なら取ってくるから。」

「でも、」

「まあ、いいじゃない。今回は二人に任せてみようよ。写真取つて来てくれるって言ってるしさ。それとも私と一緒に嫌かな？」

鈴木さんは慌てて、

「そんなことは全然無いです。でも、」

鈴木さんはまだ不満気だったが、最終的に折れてくれて「わかりました。」と言ってくれた。その後、結局俺たちは解散して二日後お互いの成果を教えあうことになった。俺たちも明日から屋上への侵入を試みることになった。

『しかし、あいつの言つてた過激な方法ってなんだろう？』

佐原 勇太 ？

帰り道で二人つきりになった時に、俺は翔に聞いてみることにした。「なあ、そろそろ教えてくれよ。過激な進入方法ってなんなんだ？俺はすこし期待を込めた目をして翔を見たが、当の本人は俺を見るとため息をついて呆れたような顔をして口を開いた。

「そんな方法無い。さっきのは嘘だ。」
「は？」

「だから、さっきのは嘘だって。あれは鈴木を納得させるために嘘をついたんだ。」

翔はそう言ったが、俺にはまだ疑問があった。

「じゃあ、何でそんなことしたんだ？お前・・・鈴木のこと苦手だっけ？」

翔は首を横に振った。

「そんなことはないぞ。でもな、さっき言ったように聞き込みをするなら女子の方が適してるだろ。それに・・・あんなことがあった後だぞ。どんな進入方法でもバレたら確実に退学か停学だろ。あの二人にさせれないだろ。」

翔の言葉を聴くと俺は「ああ、なるほど。」とそう思った。確かにあの二人にそういう事をさせるよりは俺たちがした方がましだ。しかし、

「なあ。じゃあ、俺は」

「お前はどくなっても良いから。」

「ヒド。」

その後は二人で事件とは関係ない話をしながら帰宅することになった。このときは二人で気楽に笑えてた。その日は綺麗な夕焼けだった。

次の日から俺たちは屋上への侵入を開始することにした。どうやっ

て忍び込むかは休み時間の間に二人で話し合った。うちのクラスの人たちは高木さんの死を知ったショックなのか、まだ休んでいる人が多く居たので昼休みでも話を聞かれる心配をしないですんだのは、俺たちにはラッキーだった。

「で、どうするつもりなんだ？」

正直俺には屋上への忍び込み方は検討がつかなかった。屋上への扉の鍵は新しい頑丈なものに変えられてるし、しばらくは警備員を配置しているらしい。どう考えても俺たちが忍び込むのは不可能に思えた。

「ちゃんと策はあるって。」

翔は得意そうに言った。

「でも、それには渡部を仲間にしなければならぬんだ。」

「わたなべ？クラス委員の？でも手伝ってくれるか？」

「なんとかするんだよ。放課後にでも声かけに行くぞ。」

正直まだ翔のやろうとしていることは分からなかった。

そして放課後、俺たちは帰り支度をしている渡部に声をかけた。

「なあ、渡部。今日これから暇か？」

俺たちがその声をかけると渡部は珍しいものでも見たような顔をした。まあ、確かにほとんど話したことの無い俺たちが話しかけたら驚くだろう。

「え、な、何も無いけど。でも、どうしたの？」

「単刀直入にいうけどさ、俺たち高木さんの事件の事調べててさ。」

それで渡部に頼みがあんだ。」

俺がそう言うと渡部はさっき以上に驚いた顔をした。

「高木さんの事件ってどういうこと？」

「高木が殺された可能性があるんじゃないかと思ってるんだ、俺たちは。で、それを調べるために力を貸して欲しいんだ。」

翔の言葉を聴くと渡部の顔が青くなった。

「そ、それは、殺人ってことだよな。でもどうして……」

「それはこれから説明するから。」

俺たちの推理を聞いている間、渡部の顔はずっと青かった。でも、俺たちが話し終える頃にはなにかしら納得したようで、

「そうだね。確かにおかしいね。」

「だろ。」

渡部はウンウンと頷いた後、気づいたように言った。

「本当に高木さんを殺した犯人がいるなら僕は協力するよ。でも、僕に手伝って欲しいことって何なの？」

「すこし難しいことなんだが・・・大丈夫か。渡部しか出来ないことなんだ。」

翔がそう言うのと渡部は今日のはじめての笑顔を見せた。

「大丈夫、任せてよ。」

「そうか。なら、」

そう言つて翔は話し始めた。しかし翔の話が進むに連れて渡部の顔から笑顔が消えてつた。そして話が終わる頃には真っ青になっていた。俺もこのとき初めて翔の策を聞いたが、正直俺でさえすこし尻込みする作戦だった。ましてや真面目な渡部にはシヨックが大きいだろう。なにせ、翔の策つてのは屋上の鍵を盗むことだったんだから。

佐原 勇太 ？

「それじゃ、行って来るよ。」

渡部はそう言つて職員室に入つて行つた。もちろん、これも翔の作戦の一つだ。翔の作戦と言うのは、鍵を盗み、屋上に侵入するといふものだ。もちろん、この作戦を聞いたときは俺もできるかどうか半信半疑だつた。

「鍵を盗むつて、そんなことしたらすぐバレるだろ。」

「確かに普通に盗んだらすぐにバレるだろうな。だから、代わりに似た鍵を置いて来るんだ。見た目じゃ鍵なんてほとんど変わらないだろ。」

「でも、鍵は職員室にあるんだよ。どうやって取ってくるの？」

「だから渡部、お前なんだよ。お前ならクラス委員だから適当な理由つけて鍵を取るぐらいできるだろ？そのときに変えるんだよ。」

渡部は顔がガチガチに強張つたまま職員室に入つて行つた。その間、俺たちは二人で職員室の前で待つていることになつた。

「なあ、うまくいくか？」

「そんなもんわからん。」

「はあ？お前が考えた作戦だろうが。」

「だからつて成功するかはわからんさ。渡部がうまくやることを期待するしかないさ。」

そんな会話をしていると不意に職員室の扉がガラッと開き、渡部が出てきた。渡部は「失礼しました。」と言つて退室した後、俺たちの方に歩いてきた。

「どうだつた？」

「うん。なんとか。」

そう言つて笑顔で鍵を俺たちに差し出してきた。

「おお。よくやったな。」

翔も安堵したのか顔が笑顔だった。

「でも、なんて言っ取ってきたんだ？」

「生徒会で使うからって言ってきた。」

「そっか、お前生徒会にも入ってたな。．．．でも、屋上に行くのもそんな簡単に許されたのか？」

「ううん。それはたぶん却下されると思ったから、資料室の鍵を貸して下さいって言ってきた。そのときに屋上の鍵も一緒にね。」

意外と機転の利くやつだ。俺はこのとき初めて渡部をそう評価した。「ところで、代わりの鍵って何の鍵置いてきたんだ？」

俺はまだ、翔の作戦の詳細までは聞いてない。だから、ある程度の流れは聞いていたが細かい部分は分からないことが多い。

「ああ、俺ん家の鍵。」

「そうだったんだ。．．．あ、あのさ、」

「ん？」

渡部の声に急に力が入った。

「ぼ、僕もこのまま一緒に犯人探ししてもいいかな？」

「それはかまわないよ。な？」

俺は翔の方を見た。翔も笑顔で首を縦に降った。

「ほんと？よかった。僕も絶対に犯人を捜したいから。」

渡部はホツとしたように笑顔になった。

『珍しいな。渡部がここまで自己主張するなんて。もともとこういうヤツなのかな？』

俺はすこし釈然としない感じを受けたが、一緒に捜査してくれる相手が増えたことのほうの嬉しさの方が大きかった。

その後、俺たちは一旦、教室に戻ることにした。俺はこのまま屋上に行って現場を見にいこうと提案したが、翔に却下された。最近、コイツが俺の提案を却下することが多くなったように感じるのは気のせいかな？

「お前な、いま屋上に行つたつて警備員がいるだろ。」
「あ。」

そういえば忘れていた。警察が気を利かせたのか、学校側がしたのかは分からないが、屋上の前には警備員が常駐して、先生方の許可無く入れないようになっていた。

「なら、鍵取つて来ても無駄じゃんか。」

「さあ、どうかな。・・・ところで渡部、警備員て何時くらいまでいるんだ？」

「え・・・いや、詳しいことは分からないよ。ごめん。でも、部活の後忘れ物を取りに教室まで行つた時も居たから、7時ごろまでは確実に居るよ。」

翔は「なるほど」と言つて考え込んでしまった。しかし、この時俺は翔の考え事よりあることが気になつてた。

「渡部、お前部活もやってんのか。」

「うん。卓球部だけど。でも、うちの卓球部弱いからいつも体育館の角で、バスケットやバレー部の邪魔にならないようにやってるんだ。」

「そつか。大変なんだな。俺たち二人は中学からずっと帰宅部でさ。部活つてどうもやる気にならなくてな。」

「そつなんだ。でも、二人とも運動神経良さそうなのにもつたいないよ。」

確かに俺たちは運動神経は悪いほうではない。俺も翔も中学の時から、スポーツは部活をやつてるやつ等に負けにくいくらいにできた。だけど、二人とも飽きつぱく一つのこと長続きしないから部活には入ってない。

「おゝい。おまえら、帰るぞ。」

その声に振り向くと、翔はもうカバンを背負つて帰る準備をしていた。

「え、今日忍び込むんじゃないのか？」

「今日だぞ。」

「え、じゃあそのカバン。」

俺と渡部は顔を見合って、意味が分からないという顔をしていた。

「だからさ、一回帰ってからまた来るんだよ。夜まで長いからいろいろ準備とかいるだろ？」

佐原 勇太 ？

現在時刻は午後7時30分。もう、ほとんどの部活動が終わり、学校に残ってる生徒がほとんど居なくなつた中、俺たち三人は一年二組の教室に潜伏していた。

「なあ、いつまで隠れてなきゃならないんだよ。」

俺たちは五時ごろから教室に隠れていたため、さすがに俺はだんだんと退屈になつてきて愚痴を漏らした。

「できるなら、九時ごろまで隠れてたいんだ。その方が確実だろうから。渡部はどう思う？」

「僕も・・九時ごろまで待つたほうが良いと思うけど。」

俺はため息をついた。先生方や残ってる生徒にばれない様出来るだけ物音を出さないように心がけるのは、もともと黙つてることが苦手な俺にとっては拷問に近かつた。

「はあ・・・。」

その後も俺たちは教室に隠れ続けて夜九時半を過ぎた辺りに教室からでて屋上へ続く階段の方へ向かつた。夜の学校はよくホラー映画などの舞台にされるが、実際に夜の学校に来てみるとその理由がよく分かる。文句なしに怖いのだ。光の無い夜の廊下は、自分の顔が写つてる窓にさえ恐怖を抱かせる。そして何処までも居心地の悪い静寂。

『ヤベエ・・・怖い。』

まだ残ってる人や警備員が居るかも知れないので、お互いに会話をしないで歩いてしたが、俺にはそれも恐怖を膨らませた。「もしかしたらこの二人は本当に翔と渡部だろうか？」そんなことさえ考えちゃってしまっていた。

「あ、居ないみたい。」

渡部の声が廊下に響き、そしてすぐに消えていく。

「よし、じゃあ、入るぞ。」

翔は一目散に屋上へのドアの前に行き、鍵を鎖しこみ鍵を開けた。俺たちは学校の屋上へ出た。

夜だったので、あまり細かく見れた気はしなかったが、正直俺はこの時普通だと思った。特に変わりない普通の屋上。

「それで、これからどうします?」

渡部が聞いてきた。正直俺もここからどうすればいいかわからない。「とりあえず、いろいろ見てみよう。なんか残ってるかもしれないし。あ、勇太はコレ頼む。」

翔はそう言つて、デジカメを渡してきた。

「それ、ビデオも撮れるから、念のため撮っておいて。」

「ん、オツケ。」

そういつて俺は床にカメラを向け、録画を始めた。暗かったので懐中電灯を付けながらだ。これらの道具はさっき家に帰った時に翔が持ってきたものだ。

そのあと俺たちは念入りに床を探したがロクに手がかりが見つからなかった。

「渡部、そつちなんかあった?」

「ないですよ。そつちは?」

「こつちもだよ。」

「俺のとも同じだな。」

そのあと色々と見たが、結局何も見つからなかった。

「なあ、これつてさ、最初の前提が間違つてたんじゃないか?」

「殺人じゃなくて事故か自殺つてことか?でも、制服が赤くなつてたんだぜ。」

「ねえ、谷口君。言いくいけど、それつて見間違いつて可能性はないの?」

渡部にそう言われると、翔はちょっとバツが悪そうになつて言った。「正直、改めてそう言われると自身が無くなつて来る。」

その後は三人とも黙つてしまい屋上で立ち尽くすことになった。俺

は携帯を開いて時刻を確認した。時刻はもう10時を回っていた。
「とりあえず、帰ろうぜ。明日、涼子と鈴木さんの情報を聞いてさ、
それから判断しようぜ。」

鈴木 栞 ?

「で、結局何も無かったわけね。」

涼子ちゃんが呆れたような口調で言った。

「仕方ないだろ。無いものは無かったんだ。・・・そっちは何かあったのかよ。」

谷口君にそう言われて涼子ちゃんはすこし誇らしげな顔をした。たった二日間の調査だったが、私たちはしっかりとした情報を手にしていたからだ。

「もつちろん。いろいろな話を聴けたわ。・・・ほとんどが噂の域をでないのが残念だけど。」

「その情報ってのはなんですか？」

渡部君が聞いてきた。彼は谷口君たちが仲間に加えてこれからは一緒に捜査してくれるらしい。

「あのね、たまたま警察の人の話を聴いた人が居てね・・・」

これは、私たちが集めた中で唯一信頼が持てる情報だ。たまたま他クラスに身内が警察に勤めている人がいて、その人から聞いたからだ。

「詳しいことは分からないけど、やっぱり殺人みたいなの。あの日、高木さんは屋上から落ちたけど、それよりずっと前に死んでたらしいの。」

「死んでたっていつ？」

「そこまで詳しくは知らないって。ただ、前日には死んでただろうって。」

「前日ってことは日曜日か。日曜日に殺されたってことだな。」

谷口君が手をあごに当てながら言った。

「そうらしいよ。」

「あの」

渡部君がすこしオドオドしながら口を開いた。彼とはあまり話した

ことが無かったからなのか私たちに緊張してるみたいだった。

「なら、死んだ原因ってなんだったんですか？どうして高木さんはあんな。」

彼の声がだんだんと小さくなっていった。

「あのね、失血死らしいの。おなかを何回も刺されて。」

渡部君の顔が引きつった。当然だろう。言ってる私も気分が良いものではないもの。そのあとは皆無言のまま時間が過ぎていった。涼子ちゃんと佐原君はすこし気分が悪そうな顔をして、渡部君はまだ顔が引きつったままで、谷口君はなにか考えてるみたいだった。この人はいつも冷静だ。普通の人なら考えがまとまらないだろう状況でも冷静に物事を考えてる。こういうことは凄いなと思うけど、すこし気味が悪い感じもする。

「あの・・・屋上の映像、見せてもらえませんか？」

私は沈黙に耐えられずに、気になっていたことを言った。

「屋上のビデオな。撮ったんだけどさ・・・」

佐原君からデジカメを渡されて、そこに記録されてる映像を再生してみた。涼子ちゃんも顔を寄せて画面を覗いた。ビデオを再生してすぐに涼子ちゃんが口を開いた。

「真っ暗じゃん。」

「・・・仕方ねえじゃん。夜に行ったんだしよ。昼は警備員が常駐してんだし。」

「あの警備員、今日から居なくなるらしいですよ。」

「・・・俺ら無駄なことしたの？」

佐原君が肩をガツクリと落とした。

「なら、もっかい皆で行くか。」

急に谷口君が口を開いた。さっきまで何か考えていたみたいだったのに今はもう教室のドアの前に立っていた。

「おまえな、屋上は鍵かかっているんだぞ。入れねえだろ。もう一回渡部に取って来てもらうのか？」

渡部君が小さな声で「えっ。」と呟いた。真面目な彼には職員室か

ら鍵を盗んでくるのは大変なことなのだろう。

「そんな必要ねえよ。ほら。」

谷口君がポケットからひとつの鍵を取り出した。

「え、どうしたんですか、それ。昨日使った鍵は今朝直に交換したのに。」

「昨日家に帰ってから学校に来るまで時間あったからな。合鍵作つといた。」

私たちはそのあとすぐに屋上へ向かうことになった。これから人が殺害された可能性のある場所に行くのはすこし、いやかなり抵抗があつたけど、やはりすこしワクワクした気持ちだった。

私たちが教室を出ようとするとクラスメートの前田君に話かけられた。

「なあ、お前らが小夜子の事件調べてるのってほんとか。」

「そうだけ。俺たちが」

「やめろよ。余計なことするの。」

「え。」

「もう警察も殺人事件つてことで動いてるらしい。だから、部外者は余計なことすんなつて言つてんの」

前田君は如何にも敵意むき出して感じて私たちに言った後、そのまま教室から出て行ってしまった。

「止めろつて言われてもな。」

「そうだな。俺たちだつて本気でクラスメイトが死んだ理由つてのが知りたくて動いてるんだし、別に警察に迷惑もかけてないしな。」

このことは捜査の初日に皆で話し合ったことだ。「興味本位な理由で捜査なんてしたら、警察に迷惑がかかるし、死んだ高木さんに失礼だ。だから、犯人を捜すなら真剣にやろう。」つて皆で決めたのだ。

「まあ、いいや。とりあえず早く屋上行こうぜ。」

佐原君は前田君のことは大して気にしてないようで、すぐに屋上へ

歩き出した。皆も、さっきの前田くんのことをほとんど気にしてい
ないみたいで佐原くんについていったが、私は歩きながらさっきの前
田くんのことを考えてた。

『なんか、引つかかるなあ。なんだろ。』

よく解らない気持ち悪いものが首のところ引つかかっている感じが
した。しかし、結局答えは見つからず、私たちが屋上に出たとき、
私は別のことを思い出してた。

『なんで、警察が殺人事件で捜査してるって知ってたんだろ？』

鈴木 栞 ?

屋上に出た私たちは、下の階に音が響かないように出来るだけ静かに屋上を搜索することにした。しかし、そこはとても綺麗で普通な屋上だった。

「な。何も無いだろ。」

「そうね。ここから人が落ちたのかが怪しく思えてくるわね。」

皆私と同じように思ったみたいだ。もちろん、警察が掃除しているとは思っていたけど床にはちよつとの血の跡も残っていないかった。

「やっぱり此処には何の手がかりも無いみたいですよ。先生方に気づかれる前に帰りませんか？」

渡部君はドアの方を妙に気にしているみたいだった。

「なあ、ちよつと来てくれるか？」

「あん。何かあったのか？」

「何々？」

屋上の柵の方を見てた谷口君が何か見つけたみたいだった。私も駆け寄って行って声をかけた。

「何かあったんですか？」

「この柵の縁が妙に黒くなってるんだけどさ、これって血じゃないか？」

私たちは床ばかりみていたから気づかなかったが、確かに、柵の一部が周りより黒く変色しているみたいだった。

「これって、血、ですよね。」

「だよな。」

「うん。」

皆そういった後、渡部君がその部分を触ってみると彼の指に赤黒いものがついていた。明らかに鉄が錆びて出来たものとは違う。

「でもさ、ここに血が付いていたってのはわかったけどさ。それが高木さんのものとは限らないんじゃない？」

それは確かに佐原君の言うとおりだった。そこに血がいつ付いたのか解らないし、誰の血かも解らなければ血痕を見つけても意味が無い。でも、可能性は高いのだ。

「うん。それはそうだけど、もともとここは人がほとんど来ないんだよ。それなのに柵のしかも高木さんが落ちたと思われる場所で見つかったんなら、可能性は高いんじゃないかな？」

私がそう言うと、佐原君は「なるほど」という顔をしたが、今度は渡部君が首を傾げた。

「どうしてそこから落ちたって解るんですか？」

「それは、」

「この真下が玄関だから。だろ？」

「う、うん。そう。」

私が答えるよりも先に谷口君が答えてくれた。

『やっぱりこの人は頭の回転が早い人なんだ。』このときは素直にそう思った。

『でも、どうしてこんなにすぐわかるんだろ……。まるで、自分がやったみたい。』

そのあとは特になにも発見できなくて、一旦教室に戻って考えをまとめることにした。今までわかったことを出し合ってまとめると、もちろん可能性だけの推測が基になっていることも多いけど、新たにいろいろとわかってきた。

・被害者は高木小夜子さん。6月3日の月曜日の昼頃に屋上から落ちてきた。

・おそらく、殺されたのは6月2日の日曜日。3日にはすでに死んでいた。

・おなかに多数の切り傷があったらしい。これが致命傷？

・犯人の特徴は・・・？

「犯人ってどんな人だと思う？」

私が皆に聞いてみると

「・・・思いたくないけど、たぶん学校の人・・・だよ。」
「あ、そうに涼子ちゃんはその言ってまわりを見た。」

「まあ、その可能性は高いだろ。・・・生徒か教師かはわからないけど。」

谷口君は私たちの方を睨み付けるような目で見てきた。

「お、俺はやってねえぞ。」

「私もしてないわよ。」

「ぼ、僕もやってないです。」

「わ、私も。」

「・・・プツ、皆、必死すぎだろ。」

さっきまで、私たちを睨み付けていた谷口君が急に笑いだして、それにつられた様に皆、自然と笑いあった。

家に帰って晩御飯を食べた後、お風呂に入りながら、私は犯人に対しての想像を膨らませた。

『屋上が殺害現場なら、高木さんはあそこに呼び出されて殺されたんだよね。』

屋上のドアや屋上への階段には掃除した後が無かったことから、どこか別のところで殺して屋上へ運んだって可能性は低いだろうと考えていた。

『呼び出されたんなら、知り合いかな？でも、高木さんモテたから誰かに告白に呼び出されて、そこで口論になって・・・』

そこまで考えて、私は考えるのを止めた。最近ずっとこんなこと考えてばかりいる。私は湯船から出て髪を洗いながら久しぶりに楽しいことを考えてみることにした。

『明日はせっかく休みなんだから、悪いことは忘れとこう。』
その後、私はいつもより念入りに身体を洗った。

お風呂から上がり、髪を乾かしながらテレビをみっていると不意に自宅の電話が鳴った。もう夜9時を過ぎていて、こんな時間にうちに

電話がかかってくるのは珍しかった。

「栞、電話出て。」

「はい。」

そう言つて電話を取ると、相手はクラスの佐々木さんだった。

「もしもし、佐々木ですけど。」

「もしもし、どうしたの？こんな夜遅くに。」

「えっと、あのね。山本さんのことなんだけど。もう聞いた？」

「???ただだけど、どうしたの。」

「亡くなつたんだって。」

その後、あまり詳しくは聞けなかったけど山本さんは自宅の部屋で死んでいたらしい。両親共働きで兄弟もいないので、発見した時はもう冷たくなっていたらしい。その後、佐々木さんからの電話が切れてすぐに涼子ちゃんからメールが届いた。

n o t i t l e

- - - - -
- - - - -
- - - - -

山本さんのこと聞いたと思うけど、明日、教室に10時集合。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

私はそのメールに「わかった。」と短い文で返信を送った。高木さんが死んで一週間も経たずにクラスメイトがまた一人死んだ。でも、これは、

「偶然だよ・・・ね。」

私はボソツと自分の部屋で呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4363r/>

白昼夢

2011年10月8日20時37分発行